

第16回 世界農業遺産 勉強会 レジюме

2017.07.27

阪南大学 祐岡 武志

『農業がわかると社会のしくみが見えてくる』生源寺眞一、家の光協会、2010年

二限目 「先進国＝工業国、途上国＝農業国」は本当か？(p45～p85)

【章立て】

1. 10億人が栄養不足 (p46)
2. 「途上国＝農業国、先進国＝脱農業国」は正しいか (p50)
3. 食料を大量に輸入する日本は特異な国か (p55)
4. 広がる先進国と途上国の農業力の差 (p58)
5. 低賃金でも優位に立てない途上国農業 (p65)
6. 「緑の革命」にノーベル平和賞 (p68)
7. 食料不足のアフリカに必要なのは「虹色の革命」(p73)
8. 農業保護で対立したアメリカとヨーロッパ (p74)
9. 農業物貿易をめぐる新たなルール作り (p78)
10. 先進国の農業保護を途上国が批判するわけ (p81)

1. 10億人が栄養不足 (p46)

【要点】単純な人口比較では地球上の食料は十分にある。
問題は食料が偏在していることで、それは食料を買う力(富)が偏在していること。

【理由】・世界経済の不況(2008年のリーマンショック)
・食料価格の高騰

表3 栄養不足人口の分布 (p49より) ⇒

- ・世界では8.6億人が栄養不足
- ・発展途上国で8.3億人
- ・サブサハラ・アフリカと南アジアが多い

| | |
|-----------------|------|
| 世界計 | 8.64 |
| 先進国 | 0.11 |
| CIS諸国(旧ソ連の12ヵ国) | 0.19 |
| 発展途上国 | 8.34 |
| サブサハラ・アフリカ | 2.16 |
| 東アジア | 1.63 |
| 南アジア | 3.14 |
| 東南アジア | 0.64 |
| その他 | 0.76 |

注)「Food Security Statistics」による。2002-04年に関する推計値。

【課題】食料が偏在しているとはいえ、単純に途上国から先進国へ流れているものではない。

2. 「途上国＝農業国、先進国＝脱農業国」は正しいか (p50)

【要点】基礎的な食料の貿易に関する限り、途上国＝農業国、先進国＝脱農業国の認識には修正が必要。

【理由】表4 穀物の地域間貿易 (p51より) ⇒

- ・輸出超過は先進国(北米・EU・オセアニア)
- ・輸入地域はアジアとアフリカ(表3と重なる)



【課題①】食料は先進国から途上国に流れている。

- ・表4の単位は100万トン、全穀物生産の7%が移動



【課題②】穀物の世界市場は「薄い市場」

| | 1966-68 | 76-78 | 86-88 | 96-98 |
|-------|---------|-------|-------|-------|
| 北米 | 55 | 101 | 105 | 99 |
| 南米 | 4 | 6 | 2 | 2 |
| EU | ▲25 | ▲25 | 17 | 15 |
| ロシア | 1 | ▲16 | ▲30 | ▲3 |
| オセアニア | 7 | 12 | 18 | 20 |
| アフリカ | ▲4 | ▲12 | ▲24 | ▲33 |
| 日本 | ▲12 | ▲22 | ▲27 | ▲27 |
| アジア | ▲21 | ▲26 | ▲45 | ▲55 |
| その他 | ▲5 | ▲15 | ▲13 | ▲17 |

注)「FAOSTAT」による。この表のアジアの数値は日本を含まない。

3. 食料を大量に輸入する日本は特異な国か (p55)

【要点】先進国になったために農産物の輸入陣営に加わるアジアの国々。

【理由】現在は日本が特異な例だが、韓国・台湾が追随し、中国・インドの輸入が増える見通し。

- ・北米、ヨーロッパ、オセアニアの先進国が第一集団
- ・21世紀に向けて台頭してきたアジアの国々が第二集団
- ・日本は、たまたま第二集団の先頭ランナー

【課題】今後は、経済発展によりアジアの国々が「先進国」として農産物の輸入陣営に加わる。

4. 広がる先進国と途上国の農業力の差 (p58)

【要点】先進国と途上国の農業力には明らかな差がある。

【理由①】表5 農業生産性の格差 (1980年) (p59より) ⇒

- ・労働生産性は先進国と途上国では大きな差がある
- ・土地生産性でも倍以上の差がある
- ・土地装備率=労働力一人当たりの農地面積
これも倍以上の差がある



【課題①】途上国の労働生産性が低いことは理由が二つある。

- ①面積当たりの収量 (土地生産性) が低いこと。
- ②土地装備率が小さいこと。

【理由②】表6 農業生産性の変化 (1965~95年) (p62より) ⇒

〔農産物の増加率=農業労働力の増加率+労働生産性の増加率〕

- ・途上国の農産物増加率は先進国より高い
しかし、人口増加率がそれを上回る (特にアフリカ)
- ・途上国の労働生産性の伸びが先進国に及ばない
農業生産に投入される労働の量が減っていない (低所得国ではむしろ増加している)



【課題②】途上国の農業研究では「過剰労働」や「余剰労働」の概念がある。

途上国で増加した農業労働力には貢献度の低い労働が含まれる。

※ 表5・6のデータは貴重 (引用先をきちんと確認・明記)

表5 農業生産性の格差 (1980年)

| | 先進国 | 中進国 | 後進国 |
|-------|-----|-----|-----|
| 労働生産性 | 100 | 21 | 6 |
| 土地生産性 | 100 | 40 | 49 |
| 土地装備率 | 100 | 51 | 11 |

注) Yujiro Hayami and Vernon W. Ruttan, Agricultural Development: An International Perspective, Johns Hopkins, 1985による。

表6 農業生産性の変化 (1965-95年)

(単位:%)

| | 先進国 | 途上国 | | |
|-------|------|-----|------|------|
| | | 計 | 中所得国 | 低所得国 |
| 農産物 | 1.2 | 2.2 | 2.1 | 2.3 |
| 農業労働力 | -2.2 | 0.7 | -0.1 | 1.8 |
| 労働生産性 | 3.4 | 1.5 | 2.2 | 0.5 |

注) 速水佑次郎・神門善久「農業経済論 (新版)」岩波書店による年平均の変化率。原データは「FAOSTAT」。

5. 低賃金でも優位に立てない途上国農業 (p65)

【要点】先進国に途上国の農業は追いついていない。

【理由】農業技術の移転は困難を伴う

- ・製造業やサービス業では途上国の追い上げがある (技術が移転可能)
- ・気象条件 (気温や日射量、湿度や降水量) や土壌や地形が異なる
⇒特に水が決定的な役割を果たす
ベトナム・カンボジアに広がるメコン川デルタの洪水制御
日本では新潟県の平野部の稲作の歴史 ⇒



【課題】途上国の農業力を高めることは簡単ではない。



6. 「緑の革命」にノーベル平和賞 (p 68)

【要点】 **ノーマン・ボーローグ博士が1970年のノーベル平和賞を受賞。**

【経過】 「緑の革命」の実現に中心的な役割を果たす。

- ・1943年 メキシコシティで小麦の品種改良が始まる
⇒ 小麦の新品種はインドやパキスタンの食料生産の貢献
- ・1962年 フィリピンで稲の品種改良が行われる
⇒ コメの新品種はインドネシアやフィリピンで食料の大幅増産をもたらす



◎ 矛盾 アジアには栄養不足人口が多い ⇔ 緑の革命が食糧増産に大きく貢献



【課題】 「緑の革命」の成果を正確に把握することが重要。

① 地域によって、普及率が異なる。

⇒ インドネシアやフィリピンでは改良品種が8割だが、バングラデシュやミャンマーでは低い

② 緑の革命の効果を的確に評価できるか。

⇒ 緑の革命は栄養不足人口を減らすことに貢献したはずだが、仮想的な反証は推測でしかない

③ 食糧増産の成果の分配の問題。

⇒ 地主による成果の独占や農家に高価な種子や肥料購入の負担

7. 食料不足のアフリカに必要なのは「虹色の革命」(p 73)

【要点】 緑の革命の恩恵がほとんど届いていないアフリカの変化。

【経過】 日本の技術援助によるリネカ米の開発

- ・乾燥に強い西アフリカの稲と収量の多いアジアの稲の掛け合わせ

アフリカの主食は多様

(単一品種の「緑の革命」では不十分)

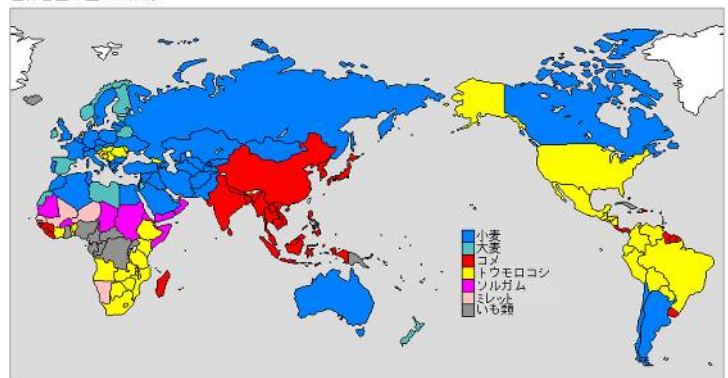
- ・キャッサバ等のイモ類
- 小麦、トウモロコシなど



【課題】 アフリカには、様々な作物を視野に入れた「虹色の革命」が必要。

(作物研究者：岩永勝が提言)

世界各國の主たる作物



(注) 世界各國の収穫面積が最大の穀物を示した(2004年)。トウモロコシが1位であっても米国などは輸出向けによるもの、大豆は飼料用が主など、必ずしもその国の主食を示している訳ではない点に注意。

ソルガム(モロコシ)、ミレット(トウジンビエ、シコクビエ、アワ等)、イモ類(Roots and Tubers)。

(資料) FAOSTAT

8. 農業保護で対立したアメリカとヨーロッパ (p 74)

【要点】 先進国(アメリカ・ヨーロッパ)の間で、農産物をめぐる貿易摩擦が先鋭化(1980年代)。

【経過】 1980年代ECが穀物輸出に転じる(p54とp51の表4)

- ・当時のECでは農産物の過剰生産が課題となる
- ・その背景には、市場価格よりも高い目標価格の設定(国が農産物を買収)



- ・余った農産物(穀物)を、安い国際価格で輸出(東欧、ソ連、アフリカへ)



● 結果 アメリカが反発、ECとの競合市場に輸出する業者に補助金で対抗。



【課題】 オセアニアを除く先進国の農業保護政策が国際的な貿易摩擦の原因となる。

※国際的には新たなルール作りの必要性が高まる。

9. 農産物貿易をめぐる新たなルール作り (p78)

【要点】 **新たなルールとしてのGATTによるウルグアイ・ラウンド。**

【経過】 「関税と貿易に関する一般協定」 = GATTによる国際交渉。

・ 1993年 ウルグアイ・ラウンドが合意 (農業分野をめぐる米・EC間の交渉が難航、8年も)

○ **内容 農業分野の合意には3つの柱。**

- ① 関税以外の輸入障壁をすべて関税に置き換え、次第に削減する約束。
- ② 輸出補助金を少しずつ減らす約束。
- ③ 国内の農業政策を変えていく約束。(実現困難・国内問題に踏み込む)

↓

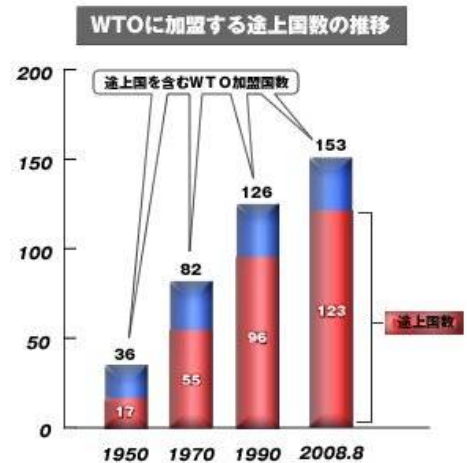
・ GATTはWTO (世界貿易機関) に移行
農業分野の合意もWTO農業協定と呼ばれる

↓

・ 2001年 ドーハ・ラウンドが交渉開始
(米と中・印の対立、2008年7月交渉決裂、以後膠着状態)

↓

【課題】 **国際的には途上国を含めた農業分野の交渉がネックとなる。**



(外務省ホームページより)

10. 先進国の農業保護を途上国が批判するわけ (p81)

【要点】 **国際交渉の場において途上国の意向が重みを増す。**

【経過】 「アジェンダ 21」 1992年に示された途上国の主張。

「輸出補助金を含む農業への援助・保護の実質的・漸進的な削減が要求されている。
これは、とくに発展途上国のより効率的な生産者に多大な損失を負わせることを避けるためである」

- ・ 先進国の農業保護政策の削減が要求されている
- ・ 先進国の保護政策が途上国の農産物の販路を狭めているという認識

↓

・ 国際市場が農産物の供給超過の傾向を強めた

↓

◎ **矛盾 先進国の農業保護政策 = 農産物の増産 ⇔ 途上国の農業発展を阻害。**

先進国：農家は国際価格より高い農産物価格を享受

途上国：農家は国際価格より低い手取額を強いられてきた

【理由】 ・ 国内の食料の価格を抑制

・ 農業が生み出した富を工業化に投資

↓

【課題】 **国の発展のための原資が農業に求められてきた。 = 「途上国は農業に課税する」**

(例) 明治時代、日本の地租

◎ **途上国は農業に課税し、先進国は農業を保護する。**

◎ **先進国の農産物増産が、途上国の農業発展を阻害するパラドックスへの対処が課題。【日本農業の可能性】**